



「生ごみを宝に！」

資源循環型社会を目指して

佐賀県伊万里市・特定非営利活動法人伊万里はちがめプラン



一般家庭や飲食店、スーパー、旅館などから出る生ごみを分別回収して堆肥化し、農家はその堆肥を使って有機野菜を作り、また、市民と農家が一緒になって休耕地で菜の花を栽培して菜種油を作っている（菜の花プロジェクト）。「生ごみを宝に」を合言葉に運営するのがNPO法人伊万里はちがめプラン（理事長・福田俊明さん）。活動を開始したのは、平成四年。本来は生ごみや廃食油を捨てる側であった家庭や飲食店、旅館などが主体となつて、不潔不要な厄介物として焼却や埋め立て処分してしまうのではなく、資源として地域で活用しようという活動だ。

現在、生ごみ回収に参加しているのは、事業所が六十軒、一般家庭が二百二十世帯、二十六のステーションでグループ回収している。生ごみを出す家庭は一月五百円を負担する。これは収集経費ではない。あくまでも、この活動に加わっているという「参加費」だ。回収量は、一日平均一・八トン、年間六百五十トン。これは市全体の生ごみの十五%にあたる量になるという。これを焼却処理するとなれば、一体どれくらいの費用がかかるだろうか。

福田さんを駆り立てる思いはなんだろう。「われわれはえてして目の前のことしか考えない。だけど、十年後、二十年後を読まないで大変なことになる、という思いでやっている」。参加してくれる一般家庭の数を現在の二百二十から、二年計画で五百世帯まで増やそうと考えている。そうならば「活動」から「市民運動」へとステップアップしていけると福田さんは言う。取材にうかがった日、回収への参加を検討しているという地区への説明会も行なわれた。「分別は大変ではないか?」「ステーション回収では野良猫などの被害は出ないか?」などの質問が出された。すでに回収に参加し菜の花プロジェクトを引っ張っている



回収された生ごみは、約1週間初期醗酵させた後、レーン式の自走醗酵マシンに投入する。マシンの回転で攪拌し、その後ふるいにかかけ、熟成を経て、約100日で堆肥として生まれ変わる。



脇山正一さんが実体験を話した。副理事長の時里重利さんいわく「理論屋ではなく、実践者にありのままのことを話してもらおうのが一番わかりやすい」。

市民による生ごみの資源化リサイクル活動には、年間千人を超す視察者がやって来る。中には「伊万里では市民がこれだけ頑張ってるんだから、うちのまちでも住民が頑張ってるってほしい」と言う行政マンもいるという。「だけど、それは違う」と福田さん。「住民、行政、企業がそれぞれ主体性を持ってやらなければ、できることではない」。

福田さんははちがめプランについて、「生ごみを堆肥化することが目的ではない」と話す。では、そのココロは？「出す人、使う人、食べる人の循環を作るのが最大の目的。そういう取り組みとして生ごみの堆肥化があるし、菜の花プロジェクトを織り交ぜて、学校教育にも関わってこういうものなんです」。当然かもしれないが、誰か一人、どこか一つが頑張るって全体が動き出す活動ではない。

菜の花プロジェクトとは、高齢者グループや一般市民と農家が休耕地を利用して菜の花を栽培し、遺伝子組み換えのない安全な菜種油を作るといふもの。菜種油は飲食店や市民が使用した後、回収してバイオディーゼル燃料に精製し、車の燃料となっている。種まき、苗の移植、収穫などは地元小中高校生や大学生も参加している。

福田さんは佐賀県環境サポーターとして県から委嘱を受け、小中高校への環境出前学習も行なっている。講義を踏まえた体験学習は子どもたちの環境意識を確実に変化させてきた。次代を担う子どもたちに、環境問題の切迫を伝えなければという福田さんの熱き思いが子どもたちに染み込んでいけるのだろうか。



はちがめプランの堆肥（写真左上）
を使って作った農作物は、直売所
「風道」で販売している。



今年四月からは事務所臨に新たにプレハブを増設して、佐賀大学の「サテライト教室」が設置され、講義としてははちがめプランで現地実習ができるようになる。

はちがめ堆肥を使って作った農産物は、はちがめふれあいステーション「風道」で直売している。朝八時から夕方六時まで毎日オープン。現在出荷農家は五十五になる。出荷者の一人中島義照さんは、はちがめプランのプラントがある地区の区長をしていた。「当初は自分たちの地域は、「ごみ」が来るなんて猛反対でした」という中島さんだが、はちがめプランの熱心さに心を動かされ、今では最も良き理解者の一人。「臭い、汚い、地下水も汚されるといふ心配があったけど、実際にはそんなことはありませんでした」。区での住民説明会も聞いて住民への協力を呼びかけてくれた。「はちがめ堆肥は固くないから使いやすい。土自体が良くなっていることは畑を見れば一目でわかるよ。大根なんか本当にきれいにできるよ」と真っ白で瑞々しそうな大根を見せてくれた。「甘みがあっておいしいもん。すぐに売れちゃうよ」と笑うのは風道の販売員・古賀美紀子さん。堆肥は農家だけでなく、旅行者がお土産として買っていくというので、この日もホテルから堆肥を買い出しに来ていた。

「行政にももう少し協力してほしいんだよね」と福田さんはボソッとこぼしたが、「やらなくちゃいけないのはわれわれだからね」とも。「はちがめ」とは伊万里地方の方言で、生きる化石と言われるカプトガニのこと。太古から変わらぬ姿で生き続けるカプトガニのように、この活動が永く続くようにとの願いを込めて名づけた。

■連絡先 千八四八―〇〇二二 伊万里市大坪町狩立乙
二四三六―一 TEL 〇九五五―二二四〇五八